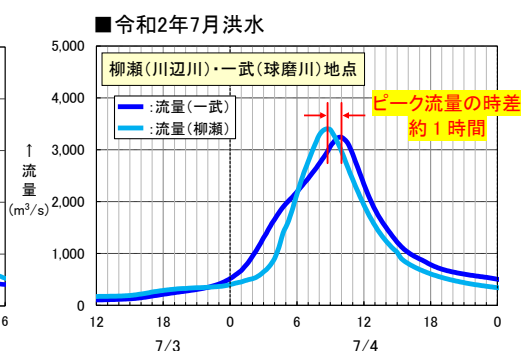
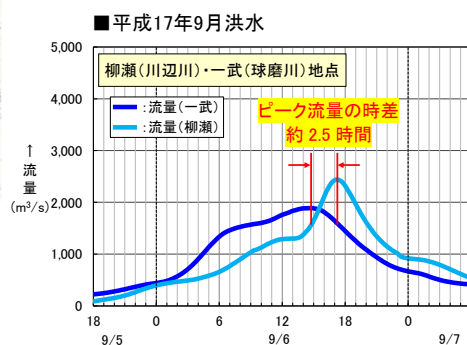
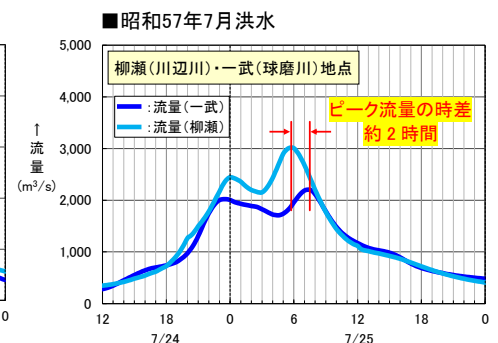
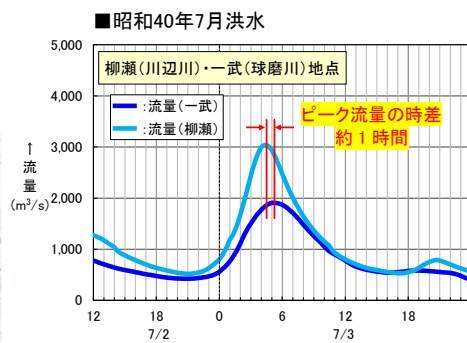
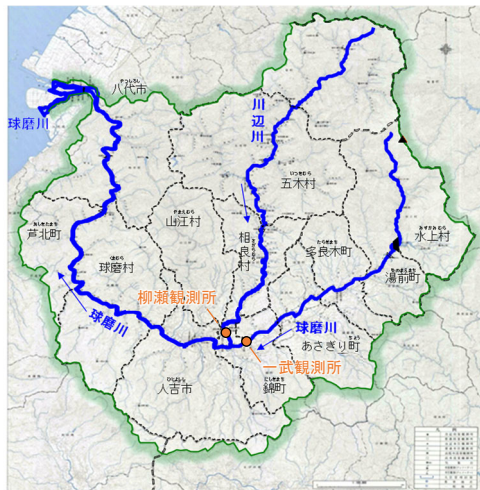


Q2. 令和2年7月豪雨も含め、球磨川水系における過去の洪水の特徴はなんですか。また、なぜ川辺川にダムが必要なのでしょう。

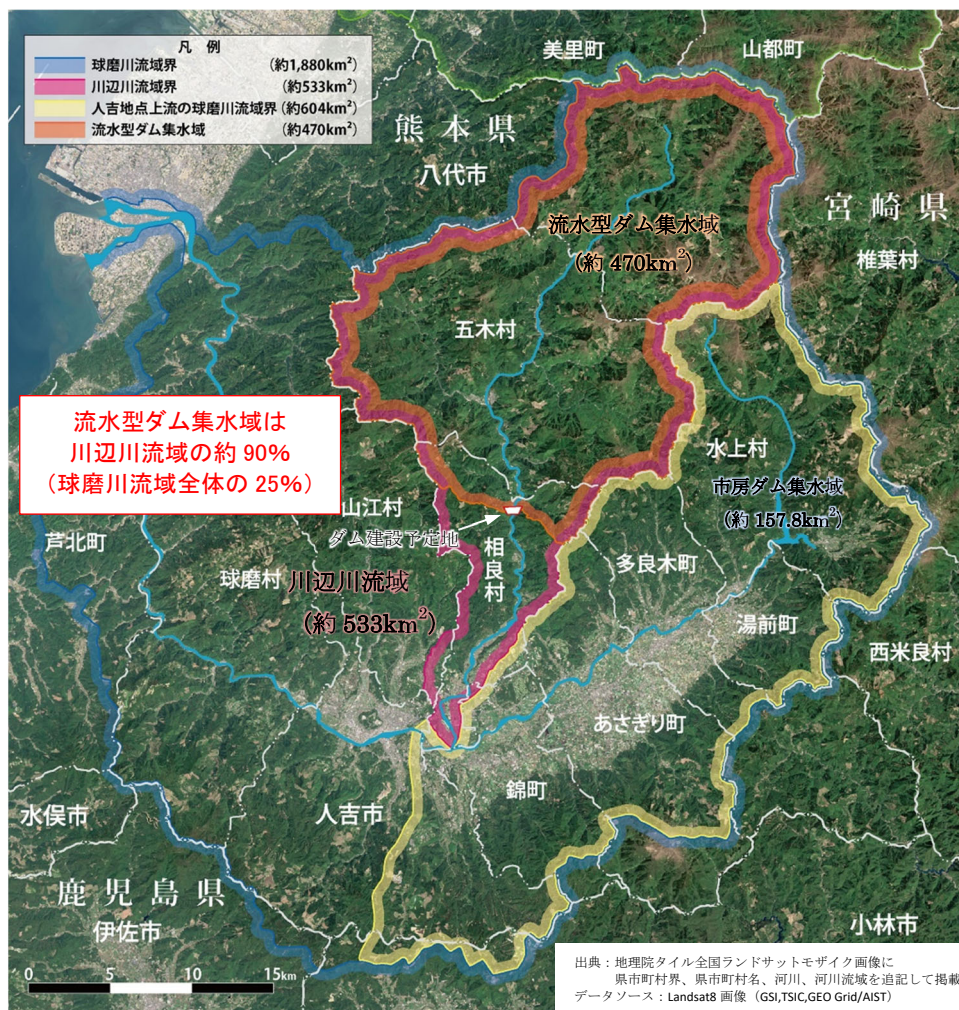
- 人吉から上流を見た場合、球磨川と川辺川の河川の長さや流域面積が同程度になっています。
- 令和2年7月豪雨では、球磨川と川辺川の洪水のピークがほぼ同時刻となり、川辺川合流点より下流では、氾濫により甚大な被害が発生しました。
- 令和2年7月豪雨以外でも、これまで被害をもたらした昭和40年7月洪水、昭和57年7月洪水、平成17年9月洪水では、球磨川と川辺川の洪水のピークがほぼ同時刻となっております。

＜参考＞過去の洪水における川辺川と球磨川のピーク流量のタイミング



- このため、川辺川の流水型ダムによって、洪水のピークを一時的に貯水し、川辺川の洪水のピーク流量を減らすことが、下流の氾濫を防ぐために必要です。
- なお、川辺川の流水型ダムの集水面積は 470km^2 であり、川辺川の流域面積 533km^2 の約9割を占めます。

<参考> 球磨川水系流域図



令和2年7月豪雨においては、流水型ダムが完成することにより、ダム下流から河口まで全川(約86km 区間)に渡り、ピーク水位を概ね1～3m低下させる効果があります。